

アシュレイ・モンタギュー「現代の部族主義」
(Ashley Montagu: 'On Tribalism Today')

竹野 一雄 訳
tr. Kazuo TAKENO

This is a translation of 'On Tribalism Today' by Ashley Montagu(1905-1999). He defines tribalism as the practice of the belief that one's own tribe is better than or superior to the tribes of others. He insists that the societies in which tribalism flourishes in its most dangerously developed forms are not the societies of what we call 'primitive peoples' but those of the most technologically developed nations of the world.

Although this essay was published during the Cold War, it is still profoundly suggestive for us and the world after September 11th.

部族主義は自分自身の属している部族が他の人々の属している部族よりも優れているとか上等であるという信念の実践である。それは宗教的儀式と世俗的行事によって維持され補強される信念であり、平和時には、部族の成員にその部族集団と一体であるという意識をあたえ、非常時や戦いの時には、全部族を統合するのに役立つのである。もちろん、すべての人間集団が部族なのではないし、すべての部族が自分たちを他の民族よりも優れているとか上等であると考えているわけではない。

世界の文明化された民族は、責任転嫁のきわめて手の込んだ方法や驚くべき合理化の能力で、部族主義を軽蔑し、それをいわゆる「原始的な」民族に特有のものとして分類する一方、自分たちはそのような「野蛮さ」からまったく免れていると考えているのである。

だが、事の真相は、部族主義がもっとも危険な発達をした形で栄える社会は世界でもっとも技術的に高度に発達した国々のうちに数えられる社会であるということなのである。

西洋世界の大国間において、また、西洋世界であれ、中東であれ、極東であれ、文明国一般において実践されているような部族主義的な信念と行動の行き過ぎは、いわゆる"原始社会"においては見られないのである。文明化された民族の部族の神々をもっとも邪悪

な神々のうちに数えられるし、他のあらゆる神々をはるかに凌ぐ規模で、世界でもっとも破壊的である。

部族主義は、それを「ナショナリズム」と呼ぶにしろ、あるいは心の弱い人々や洗脳された人々が質において欠けているものを量において補うために結束して、部族主義を、サミュエル・ジョンソン博士が述べたように、悪党の最後の言い逃れである「愛国心」と呼ぶにしても、その分だけ部族主義でなくなるわけではないのだ。

部族主義は自分自身の属する集団を他の人々の集団よりもはるか上に持ち上げることによって、本質的に他者の人間性の否定を表わしている。それは孤立主義、党派心、いわゆる「部外者」の拒絶を生む。それは相違が劣等と同一視されるような仕方で様々な相違を強調する。また、部族主義は排他性を美德扱いし、自民族中心主義と外国人嫌いを制度化する。それは弱い人々や自信のない人々にいろいろとこじつけを提供することによって彼らの不安をかき立てたり、煽ったりする。こじつけは、一種の予言したとおりに成就される予言によって、部族主義というものを、いたるところに待ち伏せし部族民の存在を脅かすと言われているきわめて有害な悪霊に対する最高度の防御物にするのである。

そのような雰囲気の中で、部族の神々は忠誠の儀式的呪文を要求するだけでなく、時折、生け贄となる犠牲者を供えることにより宥められなければならない。魔術師たちは、公式また非公式の異端諮問官たちのみならず、故上院議員ジョゼフ・マッカーシーのごとき煽動政治家のかたちで、犠牲者たちに襲いかかるのになんの困難もないのである。その方法は魔女狩りにかんするあの悪名高い書物、『魔女の槌』(1485)に見られる魔女狩りをする人々の用途のために説明されたものと大差ない。「なぜ、より多くの魔女が男性のなかよりも、かよわい女性のなかに見いだされるのか」という問いに対し、その答えは、単純かつ簡潔であった。その道の権威はこう述べていた。「それはたとえ反駁しても無駄であろう正真正銘の事実である。それは信頼できる証人たちの証言とはべつに、現実の経験によって容認されているからである。(問い9、第一部)

その非難は部族主義者にとって十分な証拠である。部族主義者が「他者」の中に感知する悪は「他者」に投影された彼自身の不安感とやましい心を表わす。なんらかの意味で危険人物と考えられている「他者」を排除し抹殺することは個人的また部族的拒絶行為となるのである。

我々自身の生きている時代に、我々は文明諸国間において部族主義に由来する恐ろしい結果をいくらか目撃してきた。第三帝国の疑似哲学者であるアルフレッド・ローゼンバー

グは、もっとも原始的な部族主義社会の成員の誰一人として異議を申し立てないであろうと思われる言葉で「支配者民族」の部族主義的精神を述べた。ローゼンバーグはこのように言う・・・「国家というものは、血筋、言語、地理的環境、および共同の政治的運命を担うという意識によって形成される際立って明確な性格によって構成されている。だが、言語以下の三つの構成要素は決定的なものではない。国家というものの決定要素は血筋である。ある民族が民族意識に初めて目覚めるとき、偉大な詩人や英雄たちは特定の血筋の人間がもつ永遠の価値観を体現したのものとして自分たちの姿を我々にあらわすのである。私の信じるところでは、血筋の深い意義についてのこの認識が今や不思議にも我々の惑星を取り囲もうとし、次々と国々に否応なく浸透しつつあるのだ」。

儀式、勲章、行事、大きな党旗を飾り立てた集会、行進、愛国的な音楽、そしてひとりひとりを血を分けた兄弟関係に結合しようともくろまれた一切の装置は、ヒトラーの時代に実に痛ましいほど効果的であった。実に数多くのドイツ人を言語に絶する怪物に変えてしまった、このブドゥ教にとりつかれたような現象は、「祖国」の名のもとで、部族主義がもたらす可能性のあるもっとも恐ろしいぞっとするような例であろう。

アフリカでは、実に数多くの新しい独立国家が誕生しているのであるが、そこでは部族主義が盛んである。イディ・アミンのウガンダとピアフラのイボ族にたいするナイジェリアの民族根絶戦争は現代部族主義の恐ろしい惨事の具体的事例である。南アフリカの白人たちの部族主義、また中東〔諸国〕のさまざまな派閥の部族主義は全集団の生き方になっている。南アフリカでは、白人たちは武力によって自分たちを「高等人種」と決め、白人以外のすべての人々を「劣等人種」という低い地位に分類している。人種差別は、無論、部族主義の一形態である。

ここで強調しておくことがとくに必要なのは、すべての部族が部族主義的であるわけではないということである。たとえば、南アフリカのブッシュマン、オーストリア原住民、プエブロ・インディアンはそれぞれ多数の部族から構成されていたが、彼らは部族間抗争や獐猛さの超愛国的誇示をしなかったのである。

部族主義が生まれるのは、ある民族ないし集団が他の民族ないし集団に「立入禁止」を宣言するような仕方のみずからを持ち上げたり目立たせたりして、頑なにその排他性を強要し、またサーベルによる威嚇と〔感情的な〕愛国主義によって、他のすべての者に対し、彼らが自分たちの権利を侵害すれば、彼らにとって悲惨な結果になると警告する場合である。その部族主義的精神は、大英帝国の全盛時に大いに流行った、あの愛国的小曲のなか

に完全に安置されている。

俺たち戦争したくないが
本気で戦争するならば
俺たち船もってるし
俺たち軍人もってるし
俺たちお金も持ってるさ

大英帝国の全盛時の英国の部族主義にこれまで到達した部族はほとんどいない。その帝国の意図的解体とともに、英国はもっとも部族主義的でない民族の一つとなったことは意義深いことである。ここに学ぶべき教訓があるだろう。部族の神々の力が衰退し、その部族民を愛国的狂乱に駆り立てる神々の力が失われると、その民は民同士また隣の民と平和に生きることに満足するのである。

少しも平和に関心がなく、権力欲に飢えた通常は小規模であるが強力な集団こそが、部族の太鼓を打ちならし、興奮と愛国的熱情の適当な調子へ、すなわち部族主義の熱狂的心酔へと人々を駆り立てる張本人である。

今日、世界でもっとも部族主義的民族はアメリカ人であろう。アメリカ人は西洋世界の他の民族よりも、いやおそらく現代世界のどのような民族よりも、礼拝の対象となる部族の神々と神々のまえて香を焚く休日を多くもっているのである。アメリカ人をさんざん苦しめる反米の恐ろしい妖怪たちのために、アメリカ人は今までよりも部族主義的になり、その結果、便宜主義的ないかなる自己追求のデマでも、もっとも悲惨な破壊的行為に駆り立てることができるのである。「我々の外敵」に対して企てられる次の攻撃と同様、ヴェトナムはアメリカ人にとって部族主義の無益さと邪悪さを学ぶ教訓とならないであろう。

部族主義の悲劇は部族主義というものが外部の敵を作ることではなく、内部の敵、つまり、人民に公正な選択権を与えようとする誠実な意図に基づかない狡猾な手段によって指導者の地位を一般に獲得した部族の「指導者たち」をつくることである。その結果は「指導者たち」がいったん権力の座につくと、権力の乱用によって権力を獲得し、より大規模にその権力を乱用し続けるのである。

魔術師たちは時々この力を無理やり押しつけられる。たとえばシベリアのチャクチ族のあいだにみられるように、チャクチ族はヒステリーに似たかたちの振る舞いの展開によって、しばしは不承不承ではあるが、シャーマンの役目の資格を得るのである。他の魔術師たちはそのような力を追求する。いずれにしても、そのような魔術師たちによく見られる

歴史は、いわゆる「原始的」社会であれ（魔術師たちが「政治家」とよばれる）文明社会であれ、彼らが権力を獲得するまえにどんなに墮落していたとしても、彼らは自分たちの手中にある権力によってさらに墮落するようになる傾向があるということである。

部族主義とはまさにそのような「指導者たち」が食いものにするものである。ヒトラーの『わが闘争』を読みさえすれば、実際、その各ページは大衆に対する冷笑的な侮蔑でいっぱいなので、「集団の連帯」を信じる人々が自分たちの意志を「指導者」の意志に委ねるのはいったいなんなのだろうかと不思議に思う。

エーリッヒ・フロムは何十年か前、彼の重要な著作『自由からの逃走』において、その問いに対してもっとも納得のいく答えを与えた。自由を恐れる人々、すなわち責任を引き受ける準備のない人々は、だれか他の人に自分たちに代わっているいろいろな責任を担わせようとするであろうし、権威としての集団に頼り、彼らが個人としては持っていない力を個人で得る代わりに集団に属することによって得るであろう、と主張した。その結果、米国在郷軍人会、米国海外従軍軍人会、フリーメイソン、ロータリー・クラブ、米国愛国婦人団体、そのほか同じ種類の数えきれない団体に人気があるわけである。

外的な理由がどうであれ、団体に「参加する人々」は自分たちを強化する手段として、なにがしかのかたちで、部族主義を採用するのである。彼らは「他者」を拒否する「高等人種」であるかもしれないし、あるいは他者に拒絶されていると感じる「劣等人種」であるかもしれない。いずれの場合も、自分たちの孤立を、自分たちの部族の神々を礼拝することができる祭壇にまで祭り上げるのである。

自分たちに対して行われている排他的行為や差別によって、人々がときおり強いられる部族主義の一例はアメリカ黒人の最近の歴史が物語っている。実際、多くのアメリカ黒人は自分たちをニグロと呼ぶことをいまや拒否し、アフリカ起源のアメリカ人と呼ばれたり呼んだりすることを好むようになってきている。彼らは「ニグロ」という言葉を軽蔑的な言葉と見なしているのである。その言葉は、彼らの見解によれば、黒人たちの部族的起源に十分に言及することができないということである。結果として、黒人たちが完全なアメリカ市民となることを妨げている、白人の排他主義に対する反動として、彼ら黒人は自分に自己同一化できるものとしてアフリカの過去へ戻ろうと提案するのである。かくて、アフリカ史、アフリカ芸術、アフリカ諸言語、アフリカ風髪型、アフリカ衣装などに関する講座が盛んとなり、これらすべてはアメリカの白人たちがたいへい否定してきたものを遂行する手段として黒人たちに提供されるのである。すなわち黒人たちが尊敬できる自己イ

メージ、黒人たちが誇りを持って見ることができる文化的背景などが提供され、そこから黒人たちは合衆国内の分離されるが平等の部族として前進できるのである。

これらすべてのことは望ましいことであり、少なくとも私自身としては、すべての学生たちにアフリカ史を教授することを重要なことと見なしているし、またアメリカ黒人の文化的起源にたいする興味が次第に強まっていることは理解できるのだが、その興味は間違った理由によって、また間違った理由のためにかき立てられてきたように思える。その反動が表しているものは白人の部族主義にたいする逆の反応である。これは私には非常に悲しい愚行である。是非ともアフリカの文物すべてを徹底的に学ぼうではないか。文化人類学者として、私はアフリカ文化の価値と質の両面を保証できる。だが、アメリカ黒人の側の部族主義への依存は、世界のいずこの部族主義がいかなる問題をも解決できないのと同様に、誰の問題も解決することはないであろう。

確かに、現代世界において、集団の誤解や集団の争いという問題解決にたいする正しい取り組みは分離政策や障壁を造ることではなく、部族主義、分離政策、障壁を壊すことであり、あたらしい国家を建設することではなく、敵意ではなく友愛の理想を目的としたあらゆる連合国家の創造であり、それによって本当に機能的な国連の目的が達成されるのである。

マルチン・ルーサーの支持者たちは、ただ「わたしはひとりの人間である」と述べた標識を持ち歩いた。黒人でもなく、白人でもなく、党派的な人間でもなく、単独の人間でもなく、ただのひとりの人間である。そのこと、ひとりの人間であることは、十分に責任のあることである。もっとも重大な問題はこの民族が他の民族より優れているとか、どこそこの集団のメンバーは他の集団のメンバーよりも優れているとかいうのではなく、ありとあらゆる集団のなかにいる個人が、その人もひとりの人間であるという事実によって、生来の権利をもっているか、すなわち、ひとりの人間としてその潜在能力を最大限発揮することができるかどうかということなのである。

部族主義者たちは何百万という同胞の人間の発達の権利を与えるのを拒否するのだが、反部族主義は部族主義者たちの部族主義を癒すことはないであろう。反部族主義は、かえって部族主義者たちの部族主義を強固にさせ、それを一層非妥協的にする可能性が強いのである。確かに、かなり長い間に亘って、耳を傾けてくれない多くの人々に、ほとんど成果がなく、そしてなお忍耐を失わずに、語りかけるのは困難かつ意気阻喪失させられることである。また、黒人でない我々が忍耐について語るのはあまりにも安易であろう。いつ

まで「忍耐」するのですか。と問う者もいるであろう。にもかかわらず、部族主義が悪しきものであり、それはいわゆる「人種問題」や「黒人問題」にたいする誤った取り組みであると信じる我々は部族主義にたいする反対論をあいまいなところがないように明白にすることが必要である。

「人種」問題とか「黒人」問題とかは存在しないのであり、白人問題があることは明確である。彼、すなわち白人こそが、黒人の問題なのである。白人の部族主義が解決されるまで、人間関係において、所謂「人種問題」においてなら意義深い進展は見られないであろう。「白人問題」は白人にさらに一層責任転嫁をするために、彼の才知を磨く砥石として、これまでよりも一層はっきりと境界を限定された被差別集団を与えることによって解決しないであろう。

白人が理解している数少ない事柄のひとつは物理的な力であるということもまた真実である。このことがまさに、白人たちがその恐ろしい理解の実行の機会をこれ以上与えられるべきでない理由なのである。

部族主義の長い歴史、とくに近年の部族主義の歴史から明白なことは、部族主義は、現代社会において、およそ考えうるかぎりの幻滅をいだかせるきわめて破壊的なかたちの集団行動になるのである。洗脳された、党旗を振りかざす愛国者は、繰り返される条件づけの結果として、「党旗」をまさに見ただけで、あるいは部族の讃歌をなにか聞いた途端、よだれをだらりとたらして、神経筋肉的反をするように刺激されるのである。そのような人は、自分の部族の「名誉」がかかっているときに同じ様な反応をするであろうし、「国家にたいする愛」というような神経ホルモンの反応ないし、このほか、彼が反応したいと思うかもしれないような、思考にかわる行為はなんでも考えるであろう。部族主義者は自分の国を愛していると真正に信じているかもしれない。そしてそこに、そのような信念のおおなる危険がある。というのは「国家にたいする愛」の名のもとに、部族主義者は祖国にたいして取り返しのつかない害をなすかもしれないからである。

人は歴史から学ばないかも知れない。にもかかわらず、ある人々にとって明白なのは、人類の近年の歴史において、いずれにしる、部族主義的精神こそが世界に大荒廃を産み出してきたということである。英国人の「カイザーを処刑せよ」ドイツ人の「神よ英国を罰し給まへ」、あるいは英国人の「英雄たちにふさわしい国」、アメリカ人の「民主主義が保証された世界」など、これらはことごとく第一次世界大戦の部族主義的標語であり、そひとつとして実現されはしなかったし、多くは正反対のことが制度として確立され、あの

罪のない人々の言語に絶する全く不必要な殺戮の時代をくぐり抜けた人々の記憶にこびりついているのである。

捏造された残虐行為の話はもっとも邪悪で悪意にみちたものであった。第2次世界大戦において、捏造話は恐ろしい現実となった。部族主義者たちは自分たちの指導者たちが教え込んでいた虚偽を信じるようになったし、機会があたえられると、そうした罪を犯した言語道断な敵どもに復讐したのである。

部族主義という精神病はひどいものなので、それは批判的検討なしに即座に部族主義的の反応を要求するいかなる申立をも受け入れる部族主義的に条件づけされた心を準備させるのである。部族主義を批判する者は、そのような状況のもとにあって、要注意人物、非国民、呪われた人物と見なされる。第一次世界大戦の折り、バートランド・ラッセルは英国の部族の指導者たちが英国民を欺いていた虚偽を攻撃したために収監された。近年、彼はヴェトナム戦争にかかわるジョンソン氏の罪について国際的調査を始めることで嘲笑されたり非難されたりした。部族主義者たちは、無論、そうした事柄が部族主義者たちを指示する言葉で言われなければ、それについて全くなにも言われたいことをはるかに好むであろう。犬が一斉に吠え出したようなエルヌルフアス司教のはげしい非難の罵声にもかかわらず、第一次および第二次世界大戦の時に、ラッセルが採用し擁護したあらゆる立場において彼が常に正しかったということが問題なのではない。彼の見解は部族主義者たちのそれとは真っ向から対立していた。それゆえに、彼は拒絶され激しく責められたのである。

私がバートランド・ラッセルの事例を挙げるのは彼が人類の偉大な恩人のひとりだからである。ラッセル卿はおそらくかれほど有名でない多くの人々の代表者としての立場を保っている。というのは、彼らは部族主義者たちがラッセルを苦しめたよりも一層ひどい不公正な処置や侮蔑を被ったのである。

部族の太鼓の音は、自分自身で考える能力を保持している人々によって、それをただそういうものとして認識される。そういう人々は好戦的な熱烈な叫びの催眠効果に屈することを、また、整列して群をなして行進することを拒否するのである。それは世界がおおいに必要としている一種の精神の独立である。今日、いままでよりもこの種の人々が増えてきているが、もし我々が部族主義の精神を克服したいといった気が少しでもあれば、そのような人々をさらに多く産み出すことが必要である。これはどのようにしてなし遂げられであろうか。原理的には、学校における教育をとおしてと、私なら答えるであろう。

だが、そのような教育はどのようにして学校に導入されるであろうか。学校というのは

今日設置されている施設のうちで最も部族主義的なもののひとつに数えられるのではないのか。実際、学校は部族主義的であって、学校が現在のように組織化され、現在の価値体系によって動機づけられ続ける限り、この方面から期待できる望みはほとんどない。

では、もたらされるべき必要な教育はどこにあるのか。必要な教育はそれが常にやって来たところから、すなわち、パートランド・ラッセル、マーティン・ルーサー・キング、アルバート・シュヴァイツァーなど学校の外の教師たち、また、社会的、政治的、国際的に関連ある問題について書いたり語ったりする人々、あるいは、要するに、我々の時代の部族主義について、もしそれに関してなにかできるならばなにができるかについて自由に論議する人々から来つづけるにちがいない、と私は思うのである。彼らは部族主義の問題を本質的に明確化することによって、個人が是々非々の立場に立って問題を判断し、それらについて彼自身の良心の決定に到達することを可能ならしめる人々である。

学校、大学、そして、実際、ありとあらゆるところでの討議や議論の自由を促進するために、あらゆることがなされるべきである。もし我々が部族主義に関する広範囲な議論を十分に確保できるのであれば、それは、思うに、他のなによりも、部族主義の危険に対して人々の理解を広げ、すくなくとも、正しい方向への第一歩になるであろう。

(朝日出版社のご好意により翻訳)

Text: Ashley Montagu: 'On Tribalism Today,' In *Humanity Speaking to Humankind*, ed. by Tsuyoshi Amemiya, Tsutomu Tanaka, Kazuo Takeno (Tokyo: ASAHI PRESS, 1985), pp. 41-56.

